

千葉市科学館・千葉県立中央博物館・千葉市動物公園連携企画 —「ちば生きもの科学クラブ」の活動とその波及効果について—

◎針谷亜希子¹、松尾 知¹、大木淳一²、伴野修一³

¹ 千葉市科学館、² 千葉県立中央博物館、³ 千葉市動物公園

1. はじめに

博物館の様々な活動において、「連携」の重要性はこれまでも頻繁に叫ばれてきた。しかし、現実問題としてネットワーク不足や人員・財政上の課題から、チケット割引制度や広報戦略、標本・資料の貸し借り以上の連携はあまり多くはない（難しい）という現状がある（2012年開催の「国際シンポジウム 人文系と自然系博物館の教育連携」に先立って実施された「人文系博物館と自然系博物館の連携に関するアンケート」によると、連携実践報告数149件に占める連携内容（複数回答）は、【展示】50%に対し【教育】32%であり、その中でも概要から見て、連携館による横断的な講座・活動は数件しか確認できなかった）。

千葉市科学館では2012年度より千葉市科学館・千葉県立中央博物館・千葉市動物公園が連携したいくつかの企画を「3館園連携企画」と呼んで実施している。2012年度はシカとカモシカをテーマとした「ちばジカプロジェクト」を、2013年度は鳥をテーマとした「ちばバードプロジェクト」を行った。両プロジェクトで主軸となっているのが「ちば生きもの科学クラブ」という連続講座である。このクラブではそれぞれ異なる特質を持つ博物館（ここでは博物館という言葉で相当施設も含む広義で用いることとする）が、互いに人・モノ・空間・ノウハウなどを提供し活用しあうことによって、地域の資源に根ざした多様なプログラムをクラブ生に提供している。同時に、クラブ生自身が主体的な発信者となることによって、地元の博物館利用の新たな形態を広く地域に伝えることも目指している。今回の発表は「ちば生きもの科学クラブ」の二年間の活動を「地域特性を生かした協働・連携事業」という観点から報告する。

まずはクラブの内容について述べる前に、これらの連携企画実施のそもそもの背景から説明する。

2. 連携企画の背景

1) JST 先進的 science 館連携推進事業（以下、先科連事業）について

千葉市科学館は独立行政法人 科学技術振興機構による助成事業「先進的 science 館連携推進事業（2012年度より「科学技術コミュニケーション推進事業 ネットワーク形成 先進的 science 館連携型」に名称変更）」に採択され、2010年度より5カ年で企画名「科学するところの伝達

とはぐくみ―日常的な科学フォーラムの創成に向けて―」を実施している。先科連事業とは「全国各地に最先端の科学技術や その社会・将来との関係性を分かりやすく伝え考える場が構築されることを目指すものであり、最先端の科学技術という新しい知を社会とつなぐ新たな科学コミュニケーション活動に挑戦し、地域の拠点として活動しうる科学館の取り組みを支援するもの」とある（JST ウェブサイトより）。千葉県科学館では先科連事業の枠組みのもと、小中学校・高校・大学・企業・研究機関・博物館・NPO 法人・有志の市民グループなどの様々な連携企画を実施しており、各種の講座や市をあげた総合的な科学の祭典「千葉県科学フェスタ」などを実施している。その中で今回報告する事例は博物館等との連携を代表する企画である。

2) 連携各館園について

以下に3館園連携企画に関わる博物館の概略を記す。

<千葉県科学館>

2007年に千葉市中央区にある愛称“Qiball（きぼーる）”と呼ばれる複合施設内（7階―10階）に開館。千葉県科学館設置管理条例に基づき千葉市教育委員会が設置者となり、開館当初より指定管理者制度を採用し運営。日常の視点で科学を捉え、子どもから大人まで楽しめる参加体験型科学館であり、活動を支えるスタッフや200名を超えるボランティアによる、人から人へのコミュニケーションを大切にした「人が主役となる科学館」をコンセプトとする。年に5回の企画展・特別展、140を超える体験型常設展示、プラネタリウム、各フロアで毎日開催されるワークショップ、クラブ活動などがある。土日祝日には子どもから大人までを対象に様々なテーマの講座やサイエンスショーなどを数多く実施している。

<千葉県立中央博物館>

1984年3月に基本構想が完成し、1989年に千葉市中央区に開館。千葉県教育委員会教育振興部文化財課の直営施設であり、「房総の自然と人間」を常設展示の全体テーマとした、千葉県の自然と歴史について学べる総合博物館。調査研究、資料の収集、整理・保存活動を行い、これらの活動の成果は、展示や講座・観察会などの教育普及活動、研究発表などをおして広く紹介される。年間を通した多数の企画展示のほか、常設展示は、「房総の自然誌」、「房総の歴史」、「自然と人間のかかわり」の3つの主要な展示から構成され、隣接する生態園では、房総の代表的な自然が再現され、動植物の生態を身近に観察することができる。

<千葉市動物公園>

1985年に千葉市若葉区に開園。千葉市都市局公園緑地部が管轄する直営施設。動物展示エリアは7つのゾーン（子ども動物園、動物科学館、モンキーゾーン、小動物ゾーン、家畜の原種ゾーン、草原ゾーン、鳥類・水系ゾーン）に分かれており、間近での動物観察やふれあい体験ができる。約140種・900点が展示され、大型の肉食獣はいないもののサル類の展示では国内で二番目に多様な種類を見ることができる。園内には植物も多く四季折々の姿が楽しめ、野鳥観察ができる大池がある。

3. 連携企画の概略

千葉市科学館(以下、科学館)が主催となっていく3館園の連携企画には複数の企画が含まれており、ここでは年度ごとの概略を紹介する。連携企画が本格始動したのは2012年度からであるが、そこに至るまでの担当者間のやり取りは2011年の3月に千葉市動物公園(以下、動物公園)と、9月に千葉県立中央博物館(以下、中央博物館)とでそれぞれ始まっていた。いくつかの試行と打ち合わせを経て2012年には「ちばジカプロジェクト」が、2013年には「ちばバードプロジェクト」の立ち上げが可能となった。当初、連携の目的は大きく二つあり、①他館にしかない資源(ノウハウ・標本など)を取り入れること、②客層が異なる3館園で互いをPRすることで来場者の回遊を促し利用者の新規開拓をねらうこと、である。今回は科学館が先科連事業の採択を受け、連携事業を行うための外部資金を得ていたことが他の2施設にとって重要な要因であった。なお、連携企画の担当者は個人的あるいは博物館分野の大会等がきっかけで、既に面識があったことを付記しておく。

1) 2011年度 動物公園との連携企画の始まり

科学館と動物公園で互いの企画をそれぞれの施設で実施するコンテンツ交換を行った。10月には「千葉市科学フェスタ2011」にて動物公園の飼育課職員が講師となって羊毛工作「ヒツジからのおくりもの」を実施し、年度末の3月には科学館の教育普及担当者が講師となり、動物公園を会場にした観察講座「動物を科学しよう!～観るほど不思議なツノのひみつ～」を実施した。科学と動物という組み合わせのイベントがこれまで多くなかったこともあり、この試行で連携の大きな可能性を再確認できた。

2) 2012年度 「ちばジカプロジェクト」について

中央博物館の夏の企画展「シカとカモシカ～日本の野生を生きる～」を盛り上げる手法として、中央博物館で科学館・動物公園との連携が提案されたことをきっかけに、3館園連携が現実のものとなった。この年の一連の連携企画が「ちばジカプロジェクト」であり、下記の3本の柱からなる。

- ・「ちば生きもの科学クラブ」：興味関心の高い特定の参加者に対し、各施設の特徴を生かした連続講座を提供する
- ・「シカ探調査隊～トナカイを調査せよ!～」：不特定多数の来場者に対して各施設を回遊するきっかけを提供するラリー型ワークシート(図1)
- ・「紹介展示」：他の2施設をポスター展示と関連展示で紹介する

この年の取り組みを、お台場で開かれた「サイエンスアゴラ2012」で発表し、審査員特別賞に選ばれたことが、その後の連携に弾みをつける形となった。

3) 2013 年度 「ちばバードプロジェクト」について

2013 年度は JST 先科連事業に加え、全国科学博物館振興財団のから助成も受け、「ちば生きもの科学クラブ」の関連事業を拡大させた（詳細は 3. にて記述）。鳥をテーマとした一連の連携企画を「ちばバードプロジェクト」とし、次の企画からなる。

- ・「ちば生きもの科学クラブ」(図 2)
 - + 「生きものへのまなざし～生物の美と科学に迫る～」: 関連展覧会
 - + 「ちば生きもの科学クラブ 2013 作品『展覧会』」: 3 館園で作品巡回展示 (図 3)
- ・「紹介展示」

また、一般向けではないが、前年度に続き「サイエンスアゴラ 2013」に出展し、第 4 回アジア動物園教育担当者会議 (AZEC2013) での事例紹介を行った。



図 1: ワークシート



図 2: 2013 年クラブチラシ



図 3: 作品展覧会チラシ

4) 運営体制について

一連の連携企画は紹介展示の一部を除いて、すべて主催: 千葉市科学館、共催: 千葉県立中央博物館・千葉市動物公園という体制で実施した。これは連携企画の予算の大半を二つの助成金から捻出し、先科連事業として実施したためである。連携の際には施設間で協定等を結ぶことはせず、科学館から中央博物館・動物公園へプロジェクトごとに共催申請をし、承認を得るという形で進めた。そのため企画立案の骨組みは科学館が行い、肉付けの段階で各館園の担当者が密な打合せを行い、それぞれの組織内での調整をし、全体を構成していくという方法で進めた。

施設により管轄が異なることが連携に際する様々な調整を難しくしていると言われていた。特に官直営の場合は予算の流動性が著しく低く、新規に予算を割くためには多くの時間と労力が必要となる。本企画では、科学館が予算について柔軟に対応できる立場であったことが、スムーズな連携企画実施を可能にした。

4. 「ちば生きもの科学クラブ」について

ここからは 2012・2013 年度の両プロジェクトで実施した、3 館園の特色がもっとも活か

された企画である「ちば生きもの科学クラブ」を例に話を進めたい。

1) 「ちば生きもの科学クラブ」とは

「ちば生きもの科学クラブ」は、千葉市内・近郊にある複数の社会教育施設を、一つのテーマでそれぞれ利用し、様々な角度から生きものを知り、考えることを目指して2012年に作られた新しいクラブである。クラブ活動では、生きものを観るヒントを提供する講座での体験から、一人ひとりが自分自身の興味・関心にあわせてテーマを決め、調べ・考え・まとめ・発表までを行う。単に各回の講座に参加して楽しむだけでなく、参加者がお互いに話し合い意見交換をしながら、自分のペースで主体的に活動を行い、「科学的に生きものや自然を観る力」を身につけることをクラブの大きなねらいとする。

2) クラブの目標

活動をより効果的で充実したものにするために、クラブでは下記の五つの目標を意識してプログラムが組み立てられている。

- ・自分の興味関心からテーマを見つける。
- ・クラブ生自らが調べたりまとめたりすることで、主体的に進める力を養う。
- ・単に参加して楽しむだけではなく、“科学的な見方、考え方”を大切にすること。
- ・自分の調べた結果や考えを、他の人にも伝えられるようにする。
- ・いろいろな分野の専門家や世代の違う参加者、興味や考え方の違う参加者と積極的に交流して、クラブ活動をより豊かなものにする。

3) 各館園の役割

主要業務が異なることを活かし、3施設がそれぞれクラブに関わっている。科学館はクラブ各回の主要なプログラムの企画・立案を行い、クラブの全体的なコーディネートおよびマネジメントも同時に行う。中央博物館・動物公園は研究者・飼育係などの専門家のかかわり、活動する場そのもの、標本・展示動物などの独自の資源を提供することで、1施設だけでは決して提供できない多面的なプログラムを生み出している。

4) クラブの特徴

- ・クラブ生の対象は小学校4年生以上（大人も可）とし、ともに活動をすることで異なった世代間での交流を積極的に行う。
- ・一貫したテーマに沿って各博物館での特徴的なプログラムに参加すると同時に、各自が課題を設定し、クラブ時間外に調査・まとめを行い、成果発表会を行う。
- ・それぞれの博物館から専門家が講師・スタッフとして関わる。
- ・特定の科学館ボランティアが継続的に、クラブの内容に合わせた研修を受け、個々のクラブ生に寄り添った活動支援を行う。

5) プログラムの内容とスケジュール

2012年度 「ちば生きもの科学クラブ ～シカとカモシカ～」

- | | |
|--|--|
| <p>① 2012年
5月12日[土] オリエンテーション(動物公園)
13:00～15:30 「ちば生きもの科学クラブ」での活動について説明します。
● 1つのキーワードで動物を観察することできっと新しい発見があるはずです。</p> <p>② 5月26日[土] 試料から学ぶ(科学館)
13:00～15:30 体の一部からも、その生きものについて詳しく知ることができます。
● 毛や角などの試料からその動物の生きる知恵・不思議に迫ります。</p> <p>③ 6月23日[土] 生体そのものを見つめる【1】(動物公園)
13:00～15:30 動物を観察するとき、どんなところに注目したら面白いだろう。
● これまでに学んだことをヒントに観察します。
● シカ科を代表して「トナカイ」のバックヤードツアーもあります。</p> <p>④ 7月7日[土] 企画展「シカとカモシカ」(中央博物館)
～9月17日[祝] カモシカはシカ科? 中央博物館でシカとカモシカの不思議に迫ります。
● 企画展開催中に各自でワークシートを片手に展示室を回ることでより深く展示を見ることが出来ます。</p> | <p>⑤ 7月27日[金] 企画展「シカとカモシカ」の裏側(中央博物館)
13:00～15:30 博物館の展示はどうやって作られているのだろう? 今回は企画展を担当した研究者から直接、その「裏側」について教えていただきます。
● 博物館の裏側、収蔵庫見学ツアーもあります。</p> <p>⑥ 8月18日[土] 調べ方・まとめ方を学ぶ(科学館)
13:00～15:30 これまでの活動を自分の視点でまとめるためのポイントを学びます。
● 夏休みの自由研究の相談をしたり、課題解決のヒントをつかむことができますはずです。</p> <p>⑦ 10月20日[土] 生体そのものを見つめる【2】(動物公園)
13:00～15:30 再び動物公園で動物観察! 季節が変わると動物の様子もまったく違います。
● どの動物が何のためにどんな風になっているか、観察して考えてみましょう。
● ウシ科を代表して「ムフロン」のバックヤードツアーもあります。</p> <p>⑧ 11月10日[土] 発表会(中央博物館)
13:00～16:00 いよいよこれまでの活動の成果を披露します。みんなそれぞれどんなところに興味を持ったのか、メンバーの発表を聞いて考えてみましょう。</p> |
|--|--|



②毛皮を比較し毛の役割を考える



③トナカイのバックヤードツアー



⑤収蔵庫見学をし、博物館の役割を知る



⑧発表会(口頭発表)

発表会でのクラブ生の作品タイトル(抜粋)

- ・ 不思議な角 角の形の理由 ・ シカと向き合うにはどうしたらいいか
- ・ 肉食動物と草食動物のちがい ・ トナカイの歩き方について
- ・ あなたはた知っている? 野生のシカとカモシカ ・ シカの分布

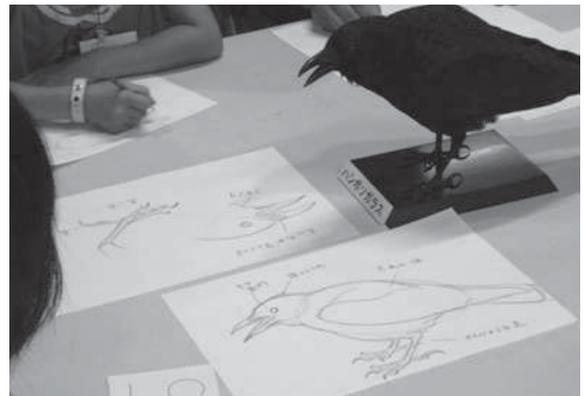
2013年度 「ちば生きもの科学クラブ 2013 ～鳥を音・色・形で科学する～」

- ① オリエンテーション (動物公園)
 5月12日(日) 13:00～15:30
 ちば生きもの科学クラブでの活動について説明します。
 また、今回のテーマである鳥を観察する、園内でのグループ活動を行います。
 みんなで楽しみながら鳥のふしぎを発見しよう!
- ② 形から迫る (科学館)
 5月26日(日) 13:00～15:30
 鳥類の最大の特徴である「翼・羽根」に注目してみよう。体の一部の形からでも、その生きものについて詳しく知ることができます。
 いろいろな顕微鏡を使いながら鳥の体に秘められた知恵とふしぎに迫ります。
- ③ 観察し表現する (科学館)
 6月15日(日) 13:00～15:30
 動物を観察するとき、どんなところに注目したら面白いだろう。
 生きものを描いた作品展示「生きものへのまなざし～生物の美と科学に迫る～」を見学し、科学的な美しさを表現する方法を体験します。(講師: 箕輪義隆氏)
- ④ 調べ方・まとめ方を学ぶ (動物公園)
 7月14日(日) 13:00～15:30
 自分の視点で活動をまとめるためのポイントや他の人にうまく伝える発表方法について学びます。
 夏休みの自由研究の相談をしたり、課題解決のヒントをつかむことができます。
- ⑤ 一番身近な鳥 ～鶏頭水煮の解剖から分かること～ (科学館)
 8月4日(日) 13:00～15:30
 から揚げや卵焼きのおおもとである「ニワトリ」について、あなたはどれくらい知っていますか?
 犬のおやつである鶏頭水煮を解剖しながら、顔と脳の形から「ニワトリ」に迫ります。
- ⑥ 企画展「音の風景—うつりゆく自然と環境を未来に伝える—」 (中央博物館)
 10月20日(日) 10:00～15:30
 午前は音から自然や環境をみる展示を見学し、研究員から展示製作の裏側についてお話しいたします。午後は生態園で「とりの声キャッチ名人」に挑戦! 鳴き声から鳥を聞き分けよう。
- ⑦ 科学的に分かりやすいまとめ方・伝え方を学ぶ (科学館)
 11月3日(日) 13:00～15:30
 自分の作品や他のクラブ生の作品をみながら良い点などを見つけ話しあい、より良い作品に仕上げます。あわせて、しっかり伝えるための発表方法の練習もします。
- ⑧ 発表会 (動物公園)
 12月8日(日) 13:00～16:00
 これまでの活動の成果を発表して、一般来園者の人にも見てもらいます。他のクラブ生がそれぞれどんなところに興味を持ったのか、発表を聞いてクラブ活動を振り返ります。

※このほかに、希望者を対象として補講日(8/25[日]、9/15[日]、11/24[日] 科学館にて)を設けます。



① ヒントをたよりに園内散策と鳥観察



③ サイエンスイラストレーション



⑤ 丸鶏の解体見学



⑥ 生態園での野鳥観察



⑧ 発表会 (ポスター発表)

発表会でのクラブ生の作品タイトル(抜粋)

- ・飛べない鳥、飛べる鳥、泳げる鳥の体のちがい
- ・鳥の翼
- ・鳥の飛び方
- ・生ゴミのカラス害、どうすれば防げるか?
- ・ムクドリのおねぐらについて
- ・だれか育てて!! ～托卵の秘密～
- ・あれ?～どうなっているの? フクロウの首～
- ・森公園の鳥たち
- ・季節によって変わる色～鳥の羽と嘴の色～
- ・ペンギンの羽毛

6) クラブ生・保護者・ボランティアの声（抜粋）

- ・今までにない体験ができた、特に発表会がとても良かった。クラブ生が全員異なる視点でまとめていたことに驚いた（クラブ生・保護者・ボランティア）。
- ・発表会は緊張したけれど、やってみて自信がついた（クラブ生）。
- ・子どもたちの熱心さや素晴らしさに改めて気付かされた（保護者・ボランティア）。
- ・大人と子どもが一緒になって活動するスタイルが良かった。子どもたちや大人のクラブ生から刺激を受けた（ボランティア）。

7) クラブ活動の成果および波及効果とその課題・展望

以下に成果を（★★）、波及効果を（★）、課題と展望を（☆）の記号を付けて、整理した。

- ★★それぞれ異なる特質を持つ博物館が、互いに人・モノ・空間・ノウハウなどを提供し活用しあうことによって、多様でより踏み込んだプログラムを作ることができ、教育普及上のメリットが大きかった。またクラブ生・保護者に対し、特徴的で満足度が高いプログラムを提供できた。
- ★★発表会は保護者や一般の方も見ることであったため、3館園の活動をより広くアピールすることができた。作品巡回展を3館園以外のところでも実施できればより効果的であると考えられる。
- ★★付き添い保護者などを中心に博物館の活動・役割を実感する場にもなった。
 - ★参画したボランティアにとっても、館内の活動では得られない充実感・達成感を得られる機会となった。
 - ★クラブ実施によって互いの施設の職員が顔の見える関係となり、クラブ以外の組織間の連携活動推進につながる企画となっている。また、外部への成果発表は組織レベルでの連携を円滑にするために、重要な活動であることが分かった。
 - ★専門家が関わることで、クラブ生の関心の広がりに対し、次のステップを提示し、さらなる探究活動を支援することができた。
 - ★成果発表の機会を持つことによって新たな人脈が生まれ、連携先が広がり、内容をさらに深めることができた。また、クラブ内のプログラムを生きものに興味が無い層へ試験的に実施する機会にもなり、新たな知見が得られた。
- ☆連携によって生まれた企画を提供できる人数に限界（最大30人）があるため、プログラムの一部をクラブ外でも活用できる形態にしていきたい。
- ☆それぞれの施設の特性を存分に活かすためには、クラブのテーマ、活動時間や時期をより柔軟に検討する必要がある。
- ☆連続講座であることを活かし、「クラブ生同士の連帯感醸成」や「より効果的な講座・プログラム間の繋がり」の検討を行いたい。
- ☆クラブ活動が「科学的に生きものや自然を観る力」の醸成につながったか、どのような効果があったかを評価する必要があるが、そのためにはクラブの継続実施や参加者の追

跡調査・手法の模索が必要となる。この点は大学等との連携が有効であろう。

5.3 館園の連携全体を通じた成果と課題

1) 成果

先科連事業が始まる前は、3館園がこのような内容に踏み込んだ密な連携企画を行ったことはなかった。今回の連携でもっとも大きな成果は以下の三点である。

- ①地理的に比較的近い（地元の）博物館が、行政区分の隔たりを超えて、それぞれの主要業務の質的な違いによる多様な資源（人・モノ・空間・ノウハウ）を無理なく活用することで、3館園がある千葉市ならではのプログラムを生み出したことである。
- ②そこには参加者としての市民と支援者としての市民（科学館ボランティア）がおり、一つの循環が成り立っている。
- ③また同時に、このような博物館が地元にあること、連携企画があることを市民に発信していくを通じ、博物館に対する考え方や利用の仕方に新しい提案をする下地を作りつつあることである。

2) 課題

今回報告した3館園連携企画は始まってまだ3年目であり、その大きなきっかけは外部助成金を得て成り立っている新規事業（5ヵ年計画の先科連事業）である。博物館利用の一つの形（たとえば、一つのテーマで複数の博物館を利用すること）の提案を浸透させていくにはあまりに時間が足りない。つまり助成が終了し、連携企画実施の根拠がなくなったときに、どのように今回作った体制を維持できるかがカギとなってくるのである。地域の人々へ博物館の存在意義を発信していくためには、継続的な活動が不可欠であり、そのためには今後予算をどのように確保するか（既存事業の中に組み込む／競争的資金を獲得する）、担当者の引継ぎを各組織内でどのように行えるか、といった体制の維持・強化が重要になってくる。これまで他の連携事業例について、話を伺うたびに耳にしたのが「人が何より重要である」ということだった。そのため、特に担当者をうまくつなぐことが今後の課題であると言える。

一方で、継続的な実施の必要性とともに、連携の日常化が進むことで生まれる懸念は、連携自体が形骸化することである。連携をする本当の目的を定め、未来へのビジョンを持ち、担当者や連携組織間での共有がしっかりできていないと、「とりあえず前年踏襲して行う」というふうになりかねない。その意味でも、仕事だけでなく“想い”を担当者に引き継いでいくことが最も重要になると考える。

6. おわりに

今回の大会のテーマにもなっている「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」について博物館ができることは、“地域に必要とされる場になること”であると考えている。そのためには地域に住む人にとって“役立つ”存在であることが必要であろう。“役立つ”とは、楽しむ場として、学びの場として、集いの場として、憩いの場として、課題解決の場として、予想もしない発見と出会う刺激的な場として・・・など、何らかの欲求・要求が満たされる場であると考えられる。

博物館がそのような場になるためには、様々なニーズを持つ人々に対して、きっかけになりうる多様な入口を設け、たえず模索していくことが重要だろう。多様な入口を用意するには引き出しや切り口が多い方がよいのは言うまでも無い。しかし博物館にはそれぞれ守備範囲がある。また博物館の役割の柱である資料収集・整理保管(育成含む)・調査研究・教育普及のバランスは施設によって異なり、そのすべてにおいて充実している理想的な博物館を目指すのは、現実的には大変難しい。そんな時、今回のクラブのように他館との連携により、それぞれの特質・専門性を組み合わせて互いを活かすという分業的な考えを導入することによって、博物館が生み出せるものの可能性をより広げることになるのではないだろうか。



サイエンスアゴラ 2013 での様子

他館との連携によって多様な入口を用意したら、次はその存在を市民に知らせ、実際に来てもらうことが必要である。これまで来たことが無い層に働きかけるには、博物館の側が街に出ることが有効であろう。まだ実現できてはいないが、今回のクラブの例で言えば、体験版プログラムや作品展覧会を駅前や図書館・スーパーなどの博物館とは関係が無い場所で開催することで、博物館の活動をもっと広く発信できると考えている。

最後のステップは、博物館を活用した彼ら自身が、その場から得た新たな「知」を発信し、それが受け手の世界を広げることにつながる(来場のきっかけとなる)という「知」の循環・連鎖を生むことだろう。博物館に多くの人が集まり、そこが人的交流や新しいアイデアが生まれる場となれば、それは地域になくてもならない活力を生む場になるだろう。

今回の連携企画「ちば生きもの科学クラブ」はこの連鎖を生むための最初の小石を投じたものだ、私たちは考えている。

※本企画は「JST 科学技術コミュニケーション推進事業 ネットワーク形成 先進的科学館連携型」の助成、および「一般財団法人 全国科学博物館振興財団 科学系博物館活動等の助成」を受けて実施しています。